

IV. 札幌駅交流拠点再整備の基本方針

IV-1 再整備に向けた基本的な取組

札幌駅交流拠点の拠点形成・コンセプトの実現に向け、これまでに整理した4つの視点に応じたそれぞれの基本的な取組事項について、考え方を整理する。

(1) 『人』“魅力的で質の高い人中心の空間の形成”に向けた取組

1) 基本（現状）認識

【パブリックライフの現状】

人を中心とした魅力的な空間とは、充実したパブリックライフを享受できる空間である。札幌駅交流拠点におけるパブリックライフは、南口駅前広場を中心にその展開が図られているが、現状では点としての展開に留まっており、大通・すすきの方面への連続性や創成川以東地区へのネットワークが弱い状況である。

【札幌駅交流拠点が果たすべき役割】

札幌都心部における今後のパブリックライフの展開は、供用が開始された創成川公園や札幌駅前通地下歩行空間をはじめとする、都心の4骨格軸－1展開軸－3交流拠点を中心に展開が強化されると考えられるが、その際、**出会い・ふれあい**といった都市の極めて大きな魅力を醸成するため、**公共空間や民有地内の公開空地等における質の高い空間づくり**が重要となる^{※3}。

このことから、札幌駅交流拠点では、道都札幌の玄関口・顔としてのイメージ向上と北海道・札幌らしさを演出するため、みどり、雪、赤レンガといった自然、歴史・文化性の表現^{※4}を念頭に置きながら、広場や美しい街並み・景観といった来訪者を迎え入れる機能の充実を図るとともに、**都心全体にパブリックライフを展開していくための起点としての空間形成**を図っていくことが必要である。

※3：ヤン・ゲール（Jan Gehl：デンマーク王立芸術学院建築学部アーバンデザイン科主任教授）は、その著書「屋外空間の生活とデザイン」の中で、公共空間で行われる屋外活動を、学校や仕事に行くといった必要活動と、散歩などのレクリエーション活動に代表される任意活動、およびこれらの発展形で他の人々との出会い・ふれあいといった交流を伴う社会活動の3つに大別している。このうち必要活動は屋外空間の質に左右されにくい、任意活動とその発展形である社会活動は影響を受けやすいことから、**出会い・ふれあい**といった都市の最も大きな魅力のひとつを醸成するためには、屋外空間の質が極めて重要であると指摘している。

※4：市民意見等調査においては、札幌の顔・シンボルとしてイメージを高めるために必要なもの、札幌らしさの演出等について、次のような意見が出されている。

- ・札幌駅周辺地区のイメージを高めるためには、広場、景観、観光案内といった来訪者を迎え入れる演出や機能を必要とする意見が多い。（市民アンケート、WEBアンケート）
- ・国際都市を目指すには赤レンガや雪といった歴史・文化性を表現することが重要である。（留学生・学生WS）
- ・札幌らしさを表現する上でも、「みどり」を増やすことが必要である。みどりは、都市空間との調和も重要な視点である。（留学生・学生WS）

【札幌都心におけるパブリックライフ】

- 札幌都心におけるパブリックライフは、これまで大通公園を中心に展開されてきている。ここで大通公園におけるパブリックライフの歴史をひも解いてみると、明治4年に火防線として整備されて以来、競馬や農業博覧会の開催、逍遙地や運動場、スケート場のほか、戦時中には食糧確保のための畑としても活用された。その後、雪まつりをはじめ、夏まつり（ビアガーデン）、ホワイトイルミネーションなど、様々な展開が図られ、今日に至っている。
- 都心におけるパブリックライフは、働く、学ぶ、遊ぶ、住む、といった基本的な都市の生活を支える人と人、人と都市とのコミュニケーション活動^{※5}であり、イベント交流や文化活動、ビジネス交流などを通じて育まれる人々の連帯感や都市を楽しみ、誇りに思う姿が、魅力的な都心の風景を創出する。
- 都心ならではの豊かなパブリックライフは、多様性・選択性に富み、いつも何か起きていて刺激に満ちていること、また逆に、都心にいながらホッとする居心地のいい空間があること、そしてそこでは、都市に生活する人同士の、あるいは観光で訪れた人々との「コミュニケーション活動」がなされ、都心の魅力が伝播されていくこととなる。
- ここで重要なのは、これらの展開が単なる商業的展開ではなく都市への愛着や誇りを醸成し、それが人々のコミュニケーションによって広く伝播していくものかどうかという点である。

【パブリックライフの展開】

- 今後の公共空間等におけるパブリックライフの展開は、都心まちづくり戦略でいう重層的なエリアマネジメント^{※6}を推進し、札幌流の持続可能な生活文化の創造をめざすべきである。
- 2010年の夏まつり（ビアガーデン）は、夜間の営業時間の短縮やスピーカー音量の制限が行われたが、こうしたマネジメントを主催者や地域住民だけでなく、広く札幌市民やその他の民間企業も参画し、継続的に展開してはじめて生活文化の創造につながるのである。なぜなら、都心におけるパブリックライフはあらゆる市民が享受すべきだからである。

※5：ここでいうコミュニケーション活動とは、都市のもつ空間や歴史・文化、人々等と出会い、触れ合うことによって、都市のよさ、素晴らしさを体感する、あるいは自らが都市活動に参画することによって、新たな都市の歴史・文化等の創造することをいう。これらの行為により、結果として人々の都市に対する愛着や誇りが醸成される。

※6：エリアマネジメントとは、「地域における良好な環境や地域の価値を維持・向上させるための、住民・事業主・地権者などによる主体的な取組（国土交通省「エリアマネジメント推進マニュアル」より）」として定義され、個人の活動や画一的な行政サービスによっては得にくい、地域自らが取り組むことによって、地域全体の公益的な価値を創造する取組を意味する。

2) 基本的な考え方

札幌駅交流拠点においては、来訪者が最初に降り立つ南口駅前広場をパブリックライフの起点として捉え、**起点に相応しい南口広場の再構築と新たな顔づくり**を図るとともに、隣接する街区等では南口広場と呼応する**協調的な空間を形成すること**によって、街路・広場等の都市インフラと建物とが調和した美しい街並み・優れた都市環境を構築するなど、札幌駅を降り立った瞬間から「世界都市さっぽろ」にきたことを実感できる象徴的な都市の風景^{※2}を創出することが求められる。

そして、駅前通地下歩行空間の利活用促進に加え、**都心内での移動を様々なシーン・歩行形態で楽しめる主要な「まち歩きの基軸回廊」の形成**などにより、札幌駅周辺と大通・すすきの周辺の両方の商業ゾーンの一体的な享受や、今後、重点的にまちづくりが行われる創成川以東地区等を含めた都心内の回遊性を高めていくなど、南口広場を起点としたパブリックライフの展開を都心全体に波及させ、都心の生活に厚みを増していくための取組を進めていくことが必要である。

これらの取組にあたっては、みどり、雪、赤レンガといった北海道・札幌の自然、歴史・文化性の表現や既存の財産を大切にしながら、人々が様々な交流活動に参加する、まち歩きを楽しむ、豊かな時間を過ごす、そういった活動を可能にする都市空間を創造していくことが重要となる。

また、今後は公共空間等におけるパブリックライフの展開についても、都心まちづくり戦略でいう**重層的なエリアマネジメントを推進し、札幌流の持続可能な生活文化の創造**を目指すべきである。

本構想案では、こうした市民・企業・行政の共創によるパブリックライフの展開を札幌流と定義し、“『人』魅力的で質の高い人中心の空間の形成”に向けた取組として、次のような方針を設定する。

- ① 札幌駅南口街区（北5西1～北5西4街区）の機能強化・魅力向上
- ② 協調的呼応空間の形成
- ③ まち歩きの基軸回廊の形成
- ④ 魅力的なパブリックライフの展開

※2：（再掲）都市の風景とは、都市を形成する建物や街路・広場および植栽といった都市景観要素に加え、そこでの都市生活・都市活動を含めた総体をいう。

3) 具体的な取組イメージ

① 札幌駅南口街区（北5西1～北5西4街区）の機能強化・魅力向上

札幌駅南口街区を一体的な空間として捉え、南口街区全体で象徴的な空間形成を図り、都市の魅力を高める。

- 現在の南口広場（北5西3・北5西4街区）は、みどり、雪など北海道・札幌の自然をより感じさせる景観形成や、人々の交流を活性化する設えなど、パブリックライフの起点として機能の強化を図る。
- 北5西1街区及び北5西2街区は、場所の特性を踏まえた機能の導入や、南口広場から創成川以東地区までの連続性を生み出す景観を形成するなどにより、新たな顔づくりに向けた取組を展開する。

② 協調的呼応空間の形成

札幌駅南口街区や、札幌駅交流拠点から連なる骨格軸沿いでは、大通・すすきの方面や都心まちづくりの重点地区である“創成川以東地区”など、都心全体への人々の誘引・パブリックライフの展開を導くための、協調的呼応空間の形成を図る。

- 札幌駅交流拠点から骨格軸に連なる都市空間の協調的・一体的な形成を図るため、協議会など関係者間で意見を交わし、まちづくりの考え方を共有するための場の設置や実施に向けた体制をつくる。
- 南口広場に隣接する街区は、道都札幌の玄関を降り立った瞬間の印象を決定づける重要な場所であるため、南口広場と呼応した広場空間の形成を図る。
- その際、各街区相互の連携強化と界限空間の形成を図るため、単調なグリッドパターンを楽しく裏切る屋内外のフットパスが連絡しあうことが望まれる。
〔例：アスティ45内の札幌駅と道庁をつなぐ斜めパス など〕

③ まち歩きの基軸回廊

まちの景色や歩行形態が様々に変化する「基軸となる歩行者動線」を形成することにより、都心内の回遊性の向上を図る。

- 4骨格軸（札幌駅前通、創成川通、大通、北3条通）及び1展開軸（東4丁目線）に加えて、北5条・手稲通、北8条通で、ストリート文化が感じられ、パブリックライフが楽しめるまち歩きの基軸回廊の形成を図る。
- 創成川通は、創成川公園の整備により、札幌都心の新たなパブリックライフを演出する空間となった北2条通以南に加え、北2条通以北も緑化空間・水辺空間など、札幌駅と都心まちづくりの重点地区である創成川以東地区との連携を強化する空間形成を図り、通り全体として隣接する街路や建築物の間で人々の「見る・見られる関係」を様々な形態・仕掛けにより創出する。

- 北5条・手稲通および北8条通は、南北駅前広場から創成川以東地区を含めて東西方向に円滑な人の流れをつくり出す役割を担うことから、今後の沿道街区の再整備時にオープンスペースのネットワーク化を図るなど、潤いのある快適な歩行者空間を形成する。

【歩行者回遊のイメージ】

- ・札幌駅と創成川以東地区とを結ぶデッキ等により、創成川通を挟んだ東西の市街地を歩行者が自由に行き来している。
- ・創成川以東地区につながるデッキ等には、「創成川を見る、見通す広場空間」が創出され、歩行者は直接創成川に降り立つことができる。そして、芸術と緑につつまれた創成川通を散策して、創世交流拠点を経由し、大通公園を西に進むと駅前通にいたる。駅前通は晴れた日は地上を、雨・雪の日は地下を選択できる。
- ・創成川に面している北5西1街区の東側は、「四季折々の変化や創成川でたたく人々、また、イベント時の見る・見られる関係をつくる」ため、カフェ・レストラン、展望デッキなどを配置する。

④ 魅力的なパブリックライフの展開

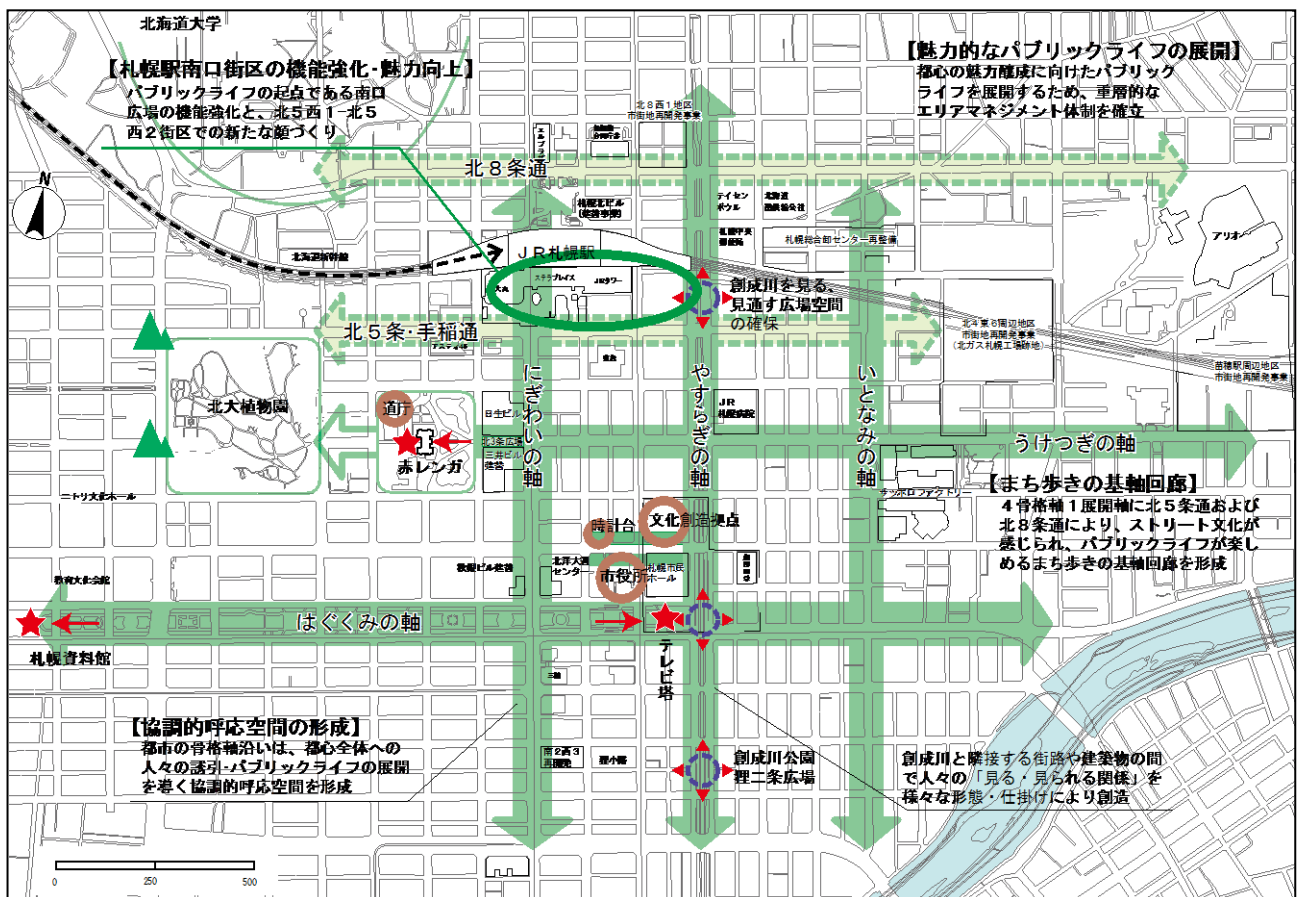
上記による空間形成とともに、札幌駅南口駅前広場を起点としながら、4骨格軸－1展開軸－3交流拠点を中心に、日常的な憩いの空間としての活用のほか、各種イベントやフェスティバル等により、魅力的なパブリックライフの展開を図る。

- 都心の魅力醸成に向けたパブリックライフを展開するため、行政、民間、市民など関係者間で意見を交わし議論する場の形成により、重層的なエリアマネジメント体制を確立する。
- 関係者がまちづくりの考え方を共有し、パブリックライフの展開による持続可能な生活文化の創造を図るため、まちづくりにかかわるルールづくりを官民で共創していくとともに、魅力ある都市空間の形成とその利活用を実践する。

【パブリックライフの展開イメージ】

- ・札幌都心におけるパブリックライフは、札幌駅南口駅前広場を基点として都心全体に展開され、都心のいたる所で市民が憩い、出会い、ふれあう光景があふれている。
- ・新しい名所となった創成川通では、創世交流拠点を核にして、芸術家のみならず、市民参加による様々なアートイベントがいつも行われている。駅前通や大通では「だい・どん・でん」をはじめとする大道芸が繰りひろげられている。
- ・札幌を代表するお祭りとなった「よさこいソーラン祭り」や、長い歴史をもつ「北海道神宮御神輿」も毎年祭典区を変えながらも、必ず札幌の顔である「まち歩きの基本軸回廊」を渡り歩く。
- ・四季の変化を楽しむ工夫として、例えば北海道の短い夏を満喫するビアガーデンは大通のみならず、創成川の水辺とともに、あるいは駅周辺の屋上でも西方の山々を眺望しつつ楽しむ。また、長い冬を満喫するため、夏のビアガーデン会場は歩くスキーコースやスケートリンクとしても活用されている。

図：パブリックライフの展開に向けた考え方



(2) 『創造』“産業や文化を創造する交流の場の形成”に向けた取組

1) 基本（現状）認識

【創造都市さっぽろ（sapporo ideas city）】

近年、人口減少、超高齢社会の到来のほか、経済活動のグローバル化や、環境問題の深刻化など、都市を取り巻く環境は大きく変化している。こうした中、芸術文化など市民の自由で創造的な活動により、まちづくりや産業を活性化することで新たな魅力を放ち、自立的かつ持続的に成長している都市が存在している。このような文化と産業が創造性に富む都市は「創造都市」と呼ばれており、近年の都市戦略のモデルとして注目されている。

札幌市においては、平成18年3月に、「創造性に富む市民が暮らし、外部との交流によって生み出された知恵が新しい産業や文化を育み、絶えず新しいコト、モノ、情報を発信していく街」を目指す意思を明確にするため、「創造都市さっぽろ（sapporo ideas city）」を宣言した。

【北海道・札幌の可能性】

北海道は、明確な四季の変化、豊富な自然や食資源など、多様な資源を有しており、さらに札幌は、充実した教育・研究機関、高度な医療機関、便利な公共交通機関などの都市機能や、文化・芸術・IT・コンテンツ産業などが集積されていることから、創造的な力によって潜在的な可能性が引き出され、新たな産業の創出などにより発展していく可能性を多く秘めている。

【創造都市さっぽろの推進に向けた取組】

「創造都市さっぽろ」の推進にあたって都心においては、これを象徴的・集約的に具現化する場を形成することとしており、創世交流拠点で文化芸術振興及び創造活動の拠点となる市民交流複合施設の実現に向けた取組が進められ、また、駅前通地下歩行空間などの公共空間では、文化・芸術活動などの創造的な活用が行われている。

さらに、現在、ユネスコ創造都市ネットワークにメディアアート分野（デジタル技術と芸術を融合した新しい芸術表現）での登録を目指している。

【札幌駅交流拠点が果たすべき役割】

道内最大の交通結節点である札幌駅交流拠点は、「創造都市さっぽろ」を推進するうえでの重要な要素となる、市民の創造性を刺激する市内外、国内外の様々な知識や才能を持った人々が集まる場所である。

したがって、本交流拠点では、北海道・札幌の環境・歴史・文化等の情報集積や、本交流拠点周辺に立地する教育・研究機関などと連携しながら、ここに集まる人々の創造性を誘発・支援する交流の場を形成することで、「創造都市さっぽろ」を推進していくうえでの起点となることが、その大きな役割となる。

2) 基本的な考え方

札幌駅交流拠点とは、道内最大の交通結節点であり、市内外、国内外から様々なヒト・モノ・情報が集まる場所である。また、周辺には、北海道大学をはじめとする教育・研究機関、高度医療機関などの都市機能立地や、IT・コンテンツなど創造産業の集積、そして、創世交流拠点では文化芸術振興及び創造活動の拠点形成に向けた取組が進められている。

このような特性を活かし、本交流拠点においては、周辺にある様々な機能や、市内外、国内外から集まるヒト・モノ・情報などの融合を促し、産業や文化の創造につながる交流の場を創出することが求められる。

その際、「人」や「環境」の視点による、北海道・札幌らしさを前提とした空間形成が、人々の交流や創造の誘発を促す大切な要素になるとともに、併せて、ここを訪れる人々の創造性を刺激する、北海道・札幌の魅力、奥行きを深く理解、共感してもらうための情報発信を行うことで、交流の場としての機能強化を図っていくことが重要となる。

また、「創造都市さっぽろ」を推進していくうえでの重要な要素として、人材集積・人材育成があげられるが、元来札幌は、交通利便性、充実した教育環境、高度な医療機関、芸術文化などの都市機能が整っているうえ、食、四季、自然など、人を惹きつける魅力と、育てる環境を十分に備えていると考えられる。

そうした中で、本交流拠点においては、その特性を活かし、ビジネスパーソン等の創造的な人材集積・滞留を支援するための、オフィス、宿泊施設などの高次都市機能の立地を図るとともに、札幌駅周辺地域と北海道大学を始めとする教育・研究機関や、今後、成長が期待される創造産業などが連携し、学生等のアイデアを実現する実験・実体験・人材育成の場を創出することが望まれる。

これらの取組で生み出される、様々な人々の交流を通じて、産学連携・異業種連携の促進などによる新しい産業、文化の創造の誘発と同時に、地域の活性化・魅力向上が図られることが期待される。

以上のことから、“産業や文化を創造する交流の場の形成”に向けた取組として、次のような方針を設定する。

- ① 産業創造を支える高次都市機能の充実
- ② 札幌・北海道の価値をPRする情報発信機能の充実
- ③ 産業創造のための交流・連携の実践

3) 具体的な取組イメージ

① 産業創造を支える高次都市機能の充実

産業創造・人材育成を支える商業・業務、宿泊、アミューズメント等の高次都市機能の充実を図る。

- 今後、再整備が見込まれる札幌総合卸センター、北8西1地区や既集積地区等において、様々な創造活動を支えるとともに、グローバル化を見据えた24時間対応可能な高次都市機能の充実を図る。
- 本交流拠点における街区再整備の際には、その立地特性を踏まえながら、創造的な人材集積・滞留を促すための、インキュベータ・オフィス等の起業化支援機能や宿泊施設などの高次都市機能を導入・集積を図る。

② 北海道・札幌の価値をPRする情報発信機能の充実

北海道・札幌の魅力・財産・特性から発現される創造性を誘発し、その付加価値を高めるため、北海道・札幌のあらゆるモノ・コト・文化などの情報発信機能の充実を図る。

- 札幌を訪れる外国人や道内外の来訪客に対して、誰もがわかりやすい観光インフォメーション機能の充実を含め、北海道の環境、食、観光、歴史、文化、産業や、低炭素都市づくりのための札幌都心における先進的取組など、北海道・札幌の良さ、奥行きを深く理解、共感してもらうための「PR・インフォメーション拠点」を形成する。

③ 産業創造のための交流・連携の実践

道内最大の交通結節機能と北海道大学等の教育・研究機関などに近接しているという優位性を生かし、札幌および北海道全体の自立化・活性化を牽引する「産業創造・人材育成」のための交流・連携を実践する。

- 創造性を刺激する市内外、国内外の様々な知識や才能を持った人々が集まる特性を活かし、札幌駅交流拠点として、周辺の教育・研究機関や創世交流拠点および産業界などと連携しながら、学生等のアイデアの実践および産学のコラボレーションを誘発する場を提供することで、人材育成と地域の活性化・魅力向上を同時に実現する。
- 「創造都市さっぽろ」を支える文化・芸術・IT・コンテンツ産業や、“札幌市経済の成長をけん引する重点分野”として位置づけられている「食」「観光」「環境」「健康・福祉」において、マーケティング機能の導入やMICE等の誘致によるヒト・モノ・情報の交流を促進・充実により、市内外、国内外との産学官連携・異業種連携による人材・知財を蓄積し、これら分野の産業の活性化の支援及び産業創造を推進する。

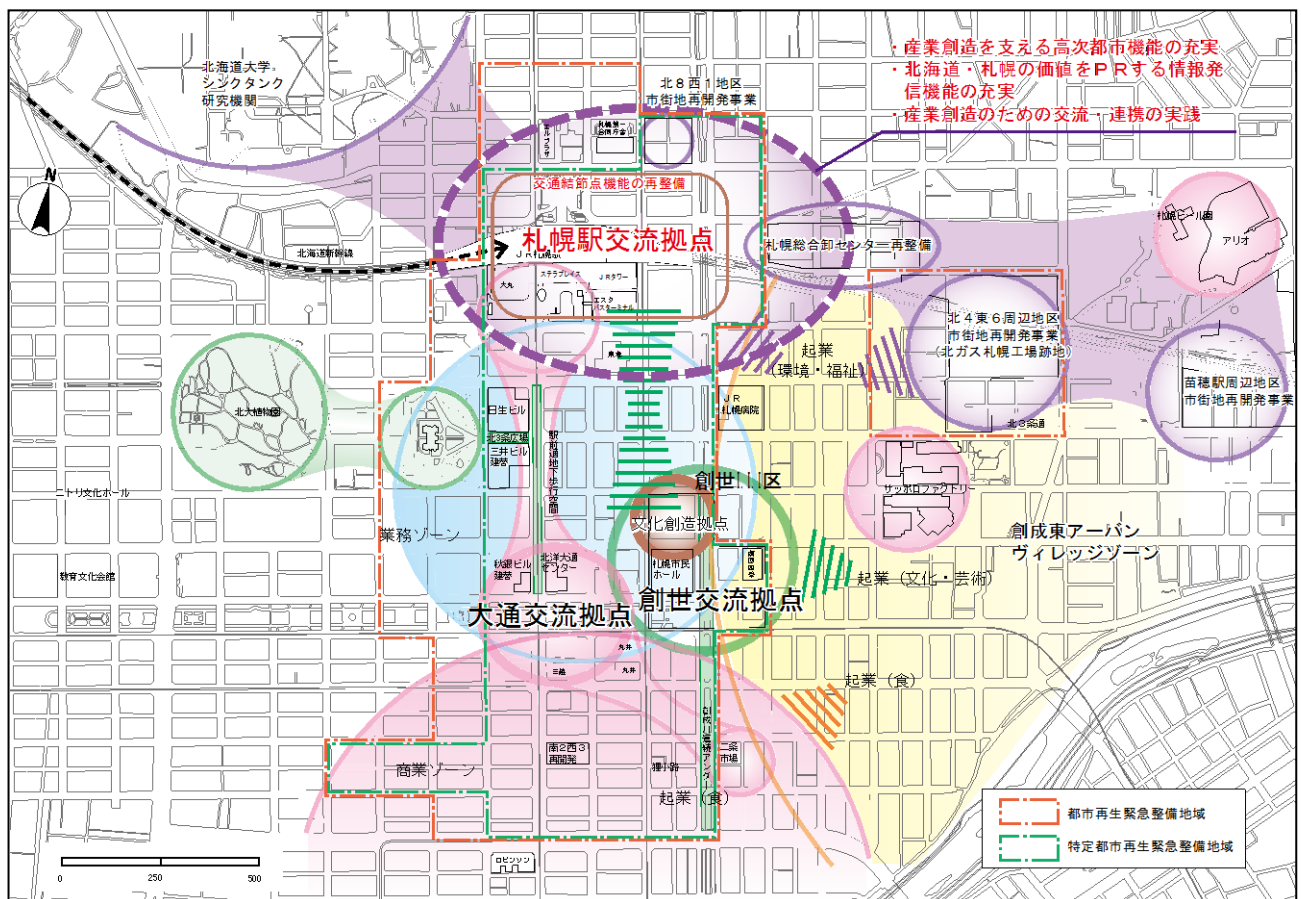
【今後北海道で成長が期待される分野の展開イメージ】

- 「環境首都・札幌」の実現を念頭に置き、**環境・エネルギー分野**では、例えば市内の企業が有する高い寒冷地技術を活かした新分野への進出や海外への販路拡大および、北4東6周辺地区の再開発等と連携した環境ソリューションビジネスなどの展開
- 食分野**では、例えば「北海道フード・コンプレックス国際戦略総合特区」と連携した高付加価値商品の開発・販売などの食ビジネスの展開
- 観光分野**では、例えば新たなインバウンド（国内外の旅行者を札幌に呼び込むこと）を創出するため、北海道・札幌の多様な資源を活用した、体験型、交流型メニュー等、着地型ニューツーリズムなどの企画開発
- 健康分野**では、例えば国の新健康フロンティア戦略^{※7}を見据えた新たな健康産業の展開や、今後の更なる少子高齢化の進展を踏まえた都心居住を支える医療・健康・福祉ビジネス等の展開

※7：新健康フロンティア戦略の趣旨（新健康フロンティア賢人会議）

国民の健康寿命の延伸に向け、国民自らがそれぞれの立場等に応じ、予防を重視した健康づくりを行うことを国民運動として展開するとともに、家庭の役割の見直しや地域コミュニティの強化、技術と提供体制の両面からのイノベーションを通じて、病気を患った人、障害のある人及び年をとった人も持っている能力をフルに活用して充実した人生を送ることができるよう支援する。

図：札幌都心部における創造都市の展開



(3) 『環境』“環境首都・札幌の実践空間の形成”に向けた取組

1) 基本（現状）認識

【環境首都・札幌】

札幌市では、“地球環境問題への対応”を市政の最重要課題の一つと位置づけ、2008年には、世界に誇れる環境都市を目指す「環境首都・札幌」を宣言した。昨年度には「札幌市温暖化対策推進ビジョン」を策定し、温室効果ガス排出量を長期（2050年）で80%削減（1990年比）、中期（2020年）で25%削減を目標に取組を進めている。

さらに、「札幌市産業振興ビジョン（H23.1策定）」では、札幌市経済の成長をけん引する重点分野の一つに「環境」を位置づけ、木質バイオ燃料をはじめとしたバイオマスエネルギーの開発・製造や、雪冷熱エネルギー、寒冷地に適した冷暖房システムである地中熱ヒートポンプシステムの導入促進など、北海道・札幌市の強みを活かした新分野での環境関連産業の創出・促進を図ることとしている。

【現在の札幌都心部における取組】

札幌都心部においては、北海道熱供給公社及び札幌エネルギー供給公社により、126haにわたるエリアに地域熱供給が行われており、この熱供給にあたっては、木質バイオマスや天然ガスの利用など、CO2排出削減に向けた取組を実践している。

札幌駅交流拠点周辺では、中央エネルギーセンターをはじめとして4つのエネルギーセンター（北2西4三井・郵政共同プロジェクトでの整備予定も含め）が集積しており、駅北口には都心融雪槽利用地域冷暖房システム（融雪槽 4,000m³）が設置されているなど、既に低炭素都市づくりに向けた先進的な取組が行われているところである。

また、このうち2つのエネルギーセンターでは熱源に加え電力供給も可能であり、今後、このような防災面でも優位性のある分散型エネルギー供給拠点の整備が順次進められる予定である。

【みどりの基本計画】

環境面のもうひとつの重要な柱である“みどり”について、札幌市では「みどりの基本計画（H23.3策定）」により、都心を「環境首都・札幌」にふさわしい街並みにつくりあげるため、大通公園や創成川公園のほか札幌駅前通などの道路空間による軸と、公共施設による拠点的なみどりを主体に、民有地も活用したみどり豊かな景観づくりを行い、街並みのにぎわいやうるおいづくりを進めることとしている。

【札幌駅交流拠点が果たすべき役割】

札幌市が重要課題として位置付けている「地球環境保全」は、言うまでもなく、今や、全社会的に取組を進めるべき課題であり、札幌駅交流拠点のまちづくりを進めていくうえでも、十分に意識していくことが必要である。さらに、本交流拠点は札幌における人々の活動の起点であり、既に先進的な取組が実践されていることから、低炭素都市づくりのための取組を象徴的に表現し、国内外に向け「環境首都・札幌」をアピールしていくことが重要である。

2) 基本的な考え方

全社会的に取組を進めるべき「地球環境保全」は、札幌都心部のまちづくりを進めていくうえでも、必ず意識しなければならない課題である。そして、今や、環境問題に対する社会的責任が企業活動においても重要な位置を占めてきている中で、札幌が国内外からの投資を呼び込むためにも、人々の活動起点である札幌駅交流拠点の役割は極めて重要となる。

折しも、本交流拠点周辺では、以前より地域熱供給など先進的な取組が進められてきており、さらなる環境低負荷型のまちづくりを推進していくうえでのベースが整っているエリアである。したがって、今後は、これまでの取組を下地として、北海道の冷涼な気候を最大限に活かした環境技術の導入や太陽光等の再生可能エネルギーの積極的な活用など、より先進的な取組を展開していくことが望まれる。

また、“みどり”については、CO2の吸収源であるとともに都市気候を緩和する機能を通じて間接的に冷暖房等に起因するCO2排出量の低減効果を有すること、そして、北海道・札幌の自然をより感じさせる景観形成を図るうえでも重要な要素であることから、さらに充実していくことが望まれる。

これらのことから、本交流拠点では、先進的な環境技術の導入を図るとともに、みどり等の自然環境が充実している北海道・札幌の魅力を端的に表現するなど、札幌駅を降り立った人々が「環境首都・札幌」を実感できる、シンボリックな空間の形成を目指していくことが必要である。

そして、こうした取組を本交流拠点の周辺にも波及させていくことで、都心全体が低炭素都市づくりを先導する場となることが求められる。

例えば、順次整備が進められる予定の、先進的な省エネルギーシステムと東日本大震災によりその重要性が再認識された防災機能をあわせ持つ、分散型エネルギー供給拠点を活用した、札幌の地域特性を踏まえたスマートエネルギーネットワーク^{※8}構築や、公共交通機関の利用促進を促す本交流拠点への路面電車の延伸などが、具体的な取組として挙げられる。

これら官民連携の取組により、地球環境に優しく、防災性にも優れた、まちづくりの実現を推進していくことが期待される。

以上のことから、“環境首都・札幌の実践空間の形成”に向けた取組として、次のような方針を設定する。

- ① 豊かなみどりを備えた拠点の創出
- ② 環境低負荷型のまちづくりの先駆的な展開
- ③ 次世代型都市基盤「スマートエネルギーネットワーク」の形成

※8：札幌版スマートエネルギーネットワーク

冬期間の暖房、給湯等に多くのエネルギーを必要とする札幌の地域特性から、熱エネルギーの効率化をベースに据え、地域熱供給のための分散型エネルギー供給拠点におけるガス・コージェネレーション・システムで製造される熱・電気を、熱供給ネットワークと系統電力ネットワークを活用して結びつけ、北海道の再生可能エネルギーをも取り込んだ次世代エネルギーシステムを構築

3) 具体的な取組イメージ

① 豊かなみどりを備えた拠点の創出

CO₂の吸収源であり、北海道・札幌の自然をより感じさせる景観を形成するうえで重要な要素となる“みどり”について、人々の活動の起点となる札幌駅南口広場を中心に充実させ、豊かなみどりを備えた拠点の創出を図る。

- 現在の南口広場（北5西3・北5西4街区）は、みどり、雪など北海道・札幌の自然をより感じさせる景観を形成。
- 各街区における再整備の際には、公開空地等によるみどりの空間を確保。
- 建物の屋上緑化や緑陰道路の整備など街路の性格に応じた緑化を推進。

② 環境低負荷型のまちづくりの先駆的な展開

「環境首都・札幌」の顔・起点にふさわしい、低炭素都市づくりのショーケース・牽引役として、札幌市温暖化対策ビジョンに掲げる「2020(平成32年)に温室効果ガス排出量を25%削減(1990年比)」の実現に向け、環境低負荷型まちづくりの先駆的な取組を展開し、その取組を都心全体に波及させていくとともに、広く国内外にアピールする拠点の形成を図る。

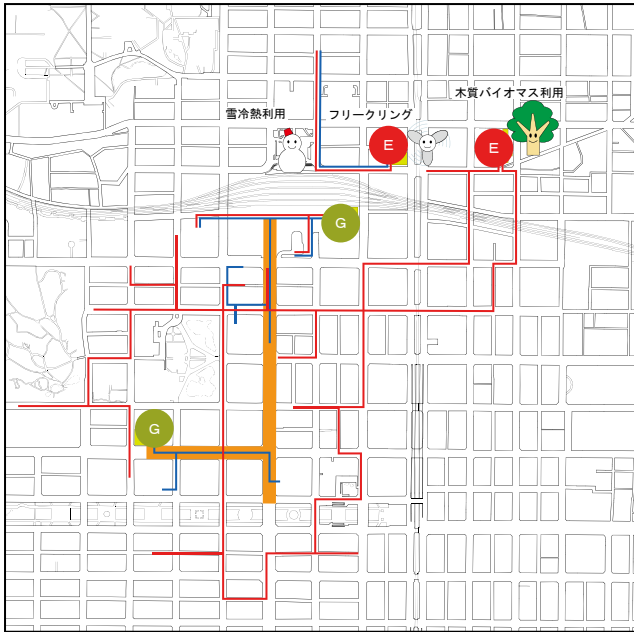
- 太陽光発電や積雪寒冷地ならではの雪冷熱エネルギー、寒冷地に適した冷暖房システムである地中熱ヒートポンプなど、再生可能エネルギーの積極的な導入を図る。
- 北海道が豊富に有する森林を活かした木質バイオ燃料等のエネルギー供給拠点などでの積極的な活用、利用拡大を図る。
- 分散型エネルギー供給拠点の整備による、“札幌版スマートエネルギーネットワーク”の形成・活用及び防災機能の向上を図る。
- 地区単位でのグリーン電力の購入など、北海道の自然・再生可能エネルギー活用に貢献する。
- 高密度・複合的土地利用展開によるエネルギー需要の集約化やエネルギー需要の平準化を図る。
- 路面電車などの公共交通の利用促進を図る。
- CO₂排出量の「見える化」や環境低負荷型まちづくりに向けた取組の情報・成果の発信など、市民や来訪者などの環境意識を啓発し、国内外にアピールする場を形成する。





③ 次世代型都市基盤「スマートエネルギーネットワーク」の形成

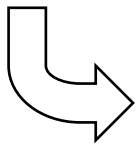
上述の“②環境低負荷型まちづくりの先駆的な展開”のうち、特に先進的な取組となる、地域全体で熱や電気を融通する次世代エネルギーシステム“札幌版スマートエネルギーネットワークの形成”に向け、以下の取組等の計画的な推進を図る。

- エネルギー供給事業者などの関係者間で、スマートエネルギーネットワークの形成に向けた考え方を共有し、実現に向けた方策を検討する場を設置する。
- 既存のエネルギーセンターを活用しながら、都心全体として適切な配置となる分散型エネルギー供給拠点の整備を進める。
- 札幌駅前通地下歩行空間に設置済みの熱導管ピットの有効活用などによる、分散型エネルギー供給拠点同士の相互接続により、都心全体のエネルギーネットワーク構築を進める。
- 分散型エネルギー供給拠点では、ネットワーク化によるエネルギーの面的利用の利点を活かし、より一層の再生可能エネルギーの積極的な導入を図るなど、将来に渡って環境負荷低減に向けた取組を追及していく。
- 相互接続された分散型エネルギー供給拠点及び系統電力を含む、エネルギーの最適化統合制御に向けた検討を進める。
- ネットワーク周辺建物への地域熱供給によるエネルギーの面的利用を促す施策展開を行う。

図：現状のエネルギーネットワーク



凡 例	
	エネルギー供給拠点
	エネルギー供給拠点 (ガスコージェネ)
	冷水管
	高温水・温水管



図：エネルギーネットワークの展開イメージ

